

鳥取市立湖山小学校

1 学校の概要

本校は、湖山地区の住宅地の中にあり、鳥取大学に隣接している。児童数405名の中規模校で、平成24年度に校舎耐震補強工事が完了した。



鳥取市地域防災計画において、鳥取市防災マップの中では土砂・津波災害は想定されていない。一時避難所として校庭が指定されている。また、洪水・土砂・地震・津波の際は、滞在型避難所として指定されている。

2 取組について

(1) 防災に関する学習

①学級活動を中心に朝の会・帰りの会等の課外の時間を活用した実践的・具体的な学習

- 放送の聞き方、ハンカチの準備等日頃からの心構え
- 安全な避難の仕方、約束（おはしも）・避難経路
- 地震の際どのような危険があるか（地震や津波の恐ろしさ）

避難訓練と関連付け、学年に合わせて理解を深めた。避難への心構えができるよう、緊張感を持たせるようにした。また、自分で考えて行動できるよう、学校だけでなく自宅・通学路での災害を想定し、災害の種類によってどんな行動をとればよいか・避難できそうな場所はどこか等考える学習を行った。実践的・具体的な学習にも、学年の系統性をより意識して持たせていく必要がある。段階的な指導が大切だと感じた。



②道徳・社会・理科等を中心とした心情・意識を高める学習

- 「稻むらの火で命を救え」等道徳資料を使った学習で、災害に関わった人々の思いを学ぶことで防災の大切さへ心情を高めた。



【児童の感想】

- 一人だけ避難せず、自分が知っている津波のことを村人みんなに教えて避難させたところに心を動かされた。
- わたしなら自分のことで精一杯なのに、地震の後津波が来ることを予想して村人を探し助けようとしたところが、人を大切にする人だと思った。
- 村人を丘の上に行かせて、自分だけでなく村人も助けた本当にすごい人だ。

- ・防災教育を支える心情として、生命尊重や郷土愛等、自分や周りの人・地域を大切にする心を育てる学習も行った。
- ・社会・理科等の教科学習で、災害の原因を知ったり、被害・防災の実際を統計的な数値や記録で学んだりして、災害を正しく理解し安全意識・防災意識を高めた。
- ・各学年とも知識面と心情面を組み合わせた学習が大切である。

③学習を深める工夫

- ・鳥取市総合防災訓練に参加することを関連付け、「地域住民と共に」という目的意識を持たせて防災学習を行った。
- ・災害に関するDVD、絵本、掛図等、資料や教具を活用した。
- ・ロールプレイ、児童の感想発表やグループの話し合い等、学習形態を工夫した。

(2) 実践的な避難訓練の工夫

①鳥取市合同避難訓練の緊急地震速報（警報）発表に合わせた校内避難訓練

- ・鳥取市の防災放送を聞いた後で避難訓練を行ったことで、鳥取市全体での災害のイメージが伝わり、校内だけの避難訓練の時より児童の危機意識が高まった。

②火災を想定した避難訓練

- ・自衛消防隊組織の消防班で消火栓を使って消火活動を実施した。職員の消火活動の動きを実際に確認することができ、児童も真剣に見守っていた。
- ・いろいろな時間帯での実施が必要である。



③鳥取市総合防災訓練

- ・大地震、津波を想定した湖山地区単位の防災訓練に参加した。
- ・実際の場面を想定した消火活動・救助活動を見学したことで、より身近に避難行動を考えることができた。
- ・高学年は、消火ホースによる放水体験をしたり災害時の通信対応やライフライン復旧活動の展示説明を聴いたりして、地域の中での自分の行動を考えることができた。



④地震を想定した校外学習時避難訓練

- ・高出力のトランシーバーを活用した。
- ・第一次避難で、休憩時に担任の指示により危険の少ない広場へ避難した。
- ・第2次避難で、移動の必要がある場合を想定し、各地区へ集団下校した。
- ・屋外での職員の役割分担と動きの確認が大切で、特に、担任と学年主任、級外職員等、立場によって細かい役割を考えておく必要がある。

(3) 学校の体制整備（保護者や地域等と連携した体制整備）

①下校時の保護者との連携（防災計画の見直し）

本校の防災計画を見直し、特に下校時についてより具体的に児童・職員・保護者の動きを想定し、体制を組んだ。〔帰宅させる場合・学校で保護する場合〕 職員研修で改めて共通理解したことでの、職員の危機管理意識が高まった。それと同時に、細かい点で課題が見えてきた。まず、校舎の立地の問題から、いくつかの課題が想定される。

- ・混み合った住宅地にあり道路が狭いので、児童の引き渡しに車を使われる家庭が多い場合、大渋滞になる恐れがある。

- ・校庭の出入口が一つしかなく狭いので、上記と同様の問題が起こると考えられる。

以上のような想定のため、実際の保護者への引き渡し訓練を行えていない。

②まちコミメールを活用した保護者との連絡体制の再整備

まちコミメールの受信状況を確認し、再度趣旨を伝えて加入を呼びかけたところ、加入者が増えた。防災に対する保護者の意識も高まったと言える。

ただ、まちコミメールの持つ問題もあり、他の連絡手段を確保しておく必要がある。

- ・他校と送信のタイミングが重なると、受信にはらつきが出る。
- ・災害時は、携帯が使えない場合が想定される。



(4) 学校防災教育アドバイザー等の活用

①ぼうさいダック 1年（防災ゲーム：学級活動）

- ・「こんなときどうする」クイズをする。
- ・紙芝居「ぼうさいマン」を見る。
- ・「ぼうさいダック」ゲームをする。

<学習の効果>

いろいろな災害(火事・地震・津波・雷・洪水・・)について、いざというときはどのように行動すべきかということを絵と動作化を通して学習することができ、大変分かりやすかった。子どもたちは最後まで興味を持って話を聞くことができた。

【児童の感想】

- いろんなクイズが楽しかった。
- 「防災ダック」をして、あぶないときどうしたらいいかよく分かった。ポーズをとるのがおもしろかった。
- 洪水や津波がきたら怖いと思った。雷が鳴ったら低くなるといいことが分かった。



②ぼうさいクイズ 4年（防災ゲーム：学級活動）

- ・いろいろな災害についてのクイズに、グループで相談して答える。
- ・解答と解説を聞く。
- ・実際の災害の映像を見る。

<学習の効果>

幅広く災害について学ぶことができた。児童の知らないことが多く、解説を聞いて関心が高まった。クイズ形式だったので、最後まで意欲的に学習できた。また、グループで考える活動が上学年らしく有効だったので、さらに効果を上げるため、事前のめあてをしっかり持たせておく必要がある。



【児童の感想】

- やけどのことや地震の時のエレベーターのことなど知らないことがたくさん分かった。
- グループで話し合って、いろいろ考えることができた。その答えを選んだ理由を発表することもできた。今まで思っていたことと違うこともあったので、覚えておきたい。
- 災害はいつ起るか分からないので、自分を守るためにも正しい避難の仕方などを勉強しておかなければならぬと思った。

③台風と天気の変化 5年（理科）

- ・台風の話（講話）
- ・気象について（クイズ）
- ・観測機器について（展示・実験）
- ・森林のはたらき（講話）
- ・災害事例（動画・写真）
- ・土砂災害の特徴（実験）
- ・土砂災害から身を守るために（講話）

<学習の効果>

- ・学習中の理科（台風と気象情報）や国語（森林のおくりもの）・社会（わたしたちの環境と食料生産）の学習とつながり、さらに学習を深めることができた。
- ・動画・観測機器・実験と、実際に目で見て体験しての学習を組んでいただき、さらに学習効果が上がった。



【児童の感想】

- 台風が起きると悪いことばかりだと思っていたけれど、水不足を解消すると聞いて、怖いけれど、少しだけいいこともあることが分かった。
- 台風や雷から身を守るには、どうしたらよいか教えていただいてよかったです。
- 条件を変えての実験で、強い雨でも、森林があれば土砂崩れが防げるのが分かって、森林のすごさが分かった。



(5) 中学校区での取組

① 代表校による授業研究会

湖東中校区では、各小中学校の置かれている状況に応じて防災教育のねらいや重点を明確にし、教育課程に位置付けるとともに、自らの命を守り抜くために「主体的に行動できる態度」を身につけさせるための防災教育の推進を図っている。

賀露小学校が全学年全学級の防災に関わる学習を公開してくれたことで、国語や理科・生活科の教科と学級活動で、どのように工夫して学習を進めていくのかという授業のイメージを広げることができた。特に、教科のねらいを達成する中で防災教育の内容を関連させて学習したり、具体物や映像を使って実際の場面を想定しながら考えたりする、授業の工夫を学ぶことができた。参観で得たものを自校に持ち帰り活用しようと、それぞれ職員の意欲を高めることができた。また、防災教育を軸にした年間指導計画の見直しの意識も高まったと言える。

② 職員研修のための講演会

鳥取県の防災教育を推進する立場から、鳥取県の各地域の取り組みを紹介された。各地域の状況（自然・行政・教育等）に合わせた、特色ある取り組みが数多くあり、湖東中校区に合った無理なくできることを進めていこうと、改めて推進への刺激を受けた。

実際の授業の中での児童の姿を参観し、県内の各地域での授業実践を研修したことで、今後の防災に関する学習の教材研究・工夫に繋がった。

3 成果と課題

<成果>

- 防災教育の視点で年間指導計画を見直し、直接の防災学習や関連した学習を行うことで、教師も児童もかなり意識が高まったと言える。また、単元構成的に行事と学習を関連させて進めたことも有効だった。その際、学年に応じた段階的な指導や知識面と心情面を組み合わせた学習を意識することが大切であると感じた。
- 避難訓練では、校内だけでなく外部（鳥取市）の取組みと関わらせることで、実感を伴ったより実践的な訓練ができた。特に、地域の中での行動を考えることができたのがよかったです。
- 校外学習時の避難訓練は、細かい役割分担の大切さがよく分かり、さらに綿密な組織やマニュアルの検討が必要であると感じた。トランシーバーの使用によって、職員と職員間、職員と学校間で即座に連絡がとれ、大変有効だった。集団下校時の各地域から学校への情報伝達も可能だった。
- 防災計画を見直したことで、実際の行動を起こした場面での問題点が明確になり、より具体的な取り組みの必要性が分かつてきました。
- 学校防災アドバイザーの活用は、専門家の話が聴けたり模擬体験・実験ができたりして、児童のよい刺激となり、学習意欲が大変高まった。
- 中学校区で授業研究や職員研修をすることは、情報交換ができるお互いの取り組みを参考にしながら学習を進めることができるので、大変有効だった。授業の工夫の面でも職員の意識改革の面でも、自校だけで取り組んでいくより進展が望めると考える。

<課題>

- どの時期にどの学習をするのが有効か、教科のねらいを見極めながら無理のない計画を学年の実態に合わせてさらに考えていく必要がある。また、資料や教具の活用が学習を深めるのに大変有効だったので、日頃から意識して集めておく必要がある。
- 地区と連携した体制作りまではまだできておらず難しいと思うが、話し合いを続けていくことや申し合わせは必要だと思う。
- 今後も校外学習時の避難訓練を続けたいと思うが、各校のトランシーバーの保有台数が足りないことが残念だ。
- 防災計画の見直しを続け、具体的な場面を想定しながら、実際に必要な組織・訓練・ものの準備を進めていく必要がある。
- 保護者との連携で、特に下校時・引き渡し時については可能なことから段階的に計画していく必要がある。
- 学校防災アドバイザーによる学習支援は、毎年定例的に低・中・高学年単位で活用していきたい。